

## あなた、今一度、考え直してみませんか

足立義弘\*・谷角素彦\*\*

以下は、私達が IRATSUME の原稿を書くにあたって、その合間に話し合ったことを、出来るだけナマの形で、と心掛け、再構成したものです。これは私達二人の対談であると同時に、“むし屋”であるあなたへの問いかけでもあります。

T. 採集報告の原稿を書くとき、いつも悩むんだけど、僕達は何のために蝶を採って、それを発表するんだらう。

A. というと？

T. 僕等は蝶が好きだし、虫や自然が好きだ。そのことは、ひとつの大きな要素だ。それと同時に、僕等のやっていることが“少しでも自然の保護とか、虫の研究をしている人達に貢献できれば”と思い、やってきました。僕等は調べたことをそのままの形で詳しく報告したいし、またそうあるべきだと思っていた。ところが、そうすればするほど報告書はマニアへの懇切丁寧な“採集案内書”となってしまう。結局は、自然の破壊に手を貸しているような気がしてきたんだ。

A. なるほど。その点については、僕も以前から同じようなことを感じていたな。僕達、俗にいう“むし屋”には、蝶をはじめそれぞれの虫を見ているだけでは飽き足らず、それを自分のものにした、所有したい、という欲望とか、好奇心を満たしたいという本能的なものが、ひとつにはあると思うんだ。

T. それは、もちろんだ。特に、子供の頃はそうだったし、むしろ、それを通じて自然との接し方、親しみ方を覚えたと思う。純粋だったんだ。しかも、その中で、生命とか自然の持つ意味を本能的に学んできたんじゃないかな。それはそれで“意味のあることで、一概に悪いということではないと思う。

A. うん。“むし屋”といわれ、採集や調査活動をしている人達も、その辺から虫とのかかわり合いを持ち始めたんだらうな。だから、そういった活動が、自然を本当に愛することや、保護することに結びついていかなければならないと思うんだけれどね。

T. けれど、“むし屋”の中で、マニア、コレクターといった人達が想像以上に多いことは事実だ。彼等の中には、切手を収集するのと同じような感覚で虫を集めている連中が多いた。自分は何種持っているとか、珍種を持っているとかいうことを自慢したりして、動植物を自然界の構成要素として、生き物として

\* 現住所：(616) 京都市

\*\* 現住所：(567) 茨木市

みることを忘れてしまっているんだらうね。だから、むやみやたらと採りまわるとか、ほんの数個の卵を採集するために木を切り倒したり、ところがまわすゴミを捨てたり、なんてことを平気でするんだと思う。

A. そうだね。“むし屋”にしても、“山屋”にしても、収集欲や征服欲に目がくらんでしまっているんだね。その土台である自然に目がいないんだ。自然に目を向けることを疎かにしては、虫や山を真に理解出来ないと思うな。

T. まさに「鹿を遡る者は山を見ず」ってやつだね。だから、ただでさえ自然環境が悪化しつつあるときに、自然の重要性や保護の必要性を認識している“むし屋”が採集、調査の記録を発表することに不安を感じるんだ。意図することとは裏腹の結果になることを恐れるわけだ。

A. たしかに現実としては、避けて通れない問題だらうね。だから、ひとつは発表の方法を考えなければ仕方がない。残念だけど、発表することの意義は、いろいろな点で見出せると思うし。

T. でも、どうしても、マニアとかコレクターの問題は残ってしまう。だから、採集や調査とその発表という形の活動だけでは、どうも片手落ちのような気がするんだ。

A. だがさもうひとつには、“むし屋”のマナーというか、ルールというか、そういう問題が出てくると思うんだ。“むし屋”同士、そして“むし屋”と自然の間には、現在、そういうものが全くないということではないんだけど。

T. そうだね。要は、“むし屋”みんなの中にそういうものが定着していないことが問題なんだ。でも、マナーとか、ルールというのは、どうしたらみんなのものになるのかな。具体的には、ゴミの問題、濫獲の問題などいろいろあるわけだ。

A. たしかに、ゴミを持ち帰らうとか、むやみに動植物を採らないとか、個々についてとやかくいうのもひとつの方法だと思うけど、根本的には、自然に対する認識を深めることから始まるんじゃないか。自然をより良く識るということかなあ。

T. うん、なるほど。僕は“むし屋”というのは、“ナチュラリスト”で、“ロマンチスト”であるべきものだと思うんだけどねえ。

A. それに“科学者”でもあるべきだとも思うんだ。何故なら、人間の好き嫌いや感傷というものも、もちろん大切な要素ではあるけど、このことや、ヒューマニズムといったような問題だけでは、自然を理解したり保護したりは出来なくなっているからね。

T. うん。そういう意味での“むし屋の自然観”というものが、問題になるんじゃないかな。どんな自然観を持っているかで、“むし屋”はコレクターにもなる

し、ナチュラリストにもなると思うんだ。まあ、現状では、大半の“むし屋”はマナー“無視屋”、自然保護“無視屋”ってところだろうけど。

- A. この間読んだ『自然保護を考える』\*って本のことだけど、自然を、生態学、地質学などの方面からだけでなく、農業、人間社会、文明などのかかわり合い、環境心理学とかいうふうに、いろいろな分野から見ているんだ。しかも、客観的な立場だね。だから、虫を採ることだけを考えてその生活環境に無関心でいるということは、自然界や人間社会のいろいろな現象をバラバラに見ていることになる。そうじゃなくて、虫なり虫を自然界の様々なつながりの中で見ていくというか、総合的に見ていくというか、そういった眼が、我々には必要だと思うんだ。
- T. 十人十色で、いろんな自然観があるけど、僕等も含めて、自己中心で考え方の狭い、とにかく自分が満足すればそれでよい、といった見方が多いね。
- A. それらが、ただ単にいけないというんじゃないで、自然というものについて、そこから一歩遠ざかって、もう一度考え直すべき時期に来ているんじゃないかな。
- T. 「考え直す」ためには、さっきも出てきた自然に対する認識不足を解消していくということは忘れてはならないねえ。ただフィールドに出て、自然と接するというだけじゃなくて、あらゆる機会にそれぞれの分野から、自然について学ぶ態度を身につけていくことが要求されているんだな。
- A. どちらにしても、先ず自然の中へ飛び込んでいくことから始まると思うんだ。それも含めて、自然に対する認識を深めていく、そんな中から“むし屋”が自然保護の先頭に立つ、そんなことを考えてみるんだ。
- T. とにかく、僕等がこの種の心配なしに、堂々と採集報告出来るような“むし屋”の質の向上に期待したいな。そして、採集・調査など日常の行動の中で、無秩序な行為を慎むと同時に、広く自然本来の意味を追究するという態度を身につけるというのが理想だな。

深夜に及ぶ二人の対談は、ときには脱線しながらも、颯々と続く……

\* 信州大学教養部 自然保護講座編、共立出版。